

わたしのチカラの源は ”わ・た・し・！”

保村 美佐江 (グループ ほちほち)

いじめを苦にしたと考へられる子どもたちの悲しいニュースが後を絶たない。どうしていじめが起きるのだろうか？ どうしてなくならないのだろうか？ いじめとどう向き合ったらいいのか？ 「いじめは無いもの」と考へてきたこの社会ではなかなか聞かえてこない問いかけた。この2月、イギリスから日本を訪れた「10代の子どもたちの参画プロジェクト」の取り組みから模索してみたい。

子どもたちが主体

いじめが深刻なのは日本ばかりではない。イギリスも然り。いじめをなくすさまざまな取り組みがNPO/NGO発で進められている。そのひとつに03年から始まった「IPOWER I (アイ・パワー・アイ)」がある。10代の子どもたちが主体

的にかかわるいじめ撲滅のキャンペーンだ。ダンスや歌などのパフォーマンス、子どもたち自身が考へた子どもたちのためのワークショップ(参加型学習、以下ワーク)を開催している。この2月、イギリスから演劇の手法による「アクションワーク」と呼ばれるワークを創ったチームがやってきた。日本の中学生と一緒にワークを共有し、いじめや暴力について学びあい、意見交換するためだ。

イギリスの子どもたちは14歳から17歳の4人(男女2人ずつ)、アラブ系・中国系・白人と多様な文化的背景を持つメンバ

ーだ。1週間の滞在中にリハーサル・公開ワークショップを含め、計6回のワークを実施した。期間中、筆者は2回のワークに参加したが、子どもたちのワークへの姿勢は自然体で、チームメンバー間においても、ワーク参加者に対して、対等な人権感覚に溢れるアプローチであった。2回目に参加した方が、子どもたちのファシリテーターとしての力量がアップし、また、参加者への対応も柔軟になり、その場に応じた展開を進めると感じた。自分の意見を語り、いじめの現状を伝えたイギリスの子どもたち、ワークを通して参加した日本の子どもたちと共に彼らもまたさらにエンパワー(本来の自身の力を発揮すること)を体験していたようだ。

アクションワークの実際と可能性

ワークの一場面(フォーラムシアター)を紹介しよう。

：休み時間、廊下で気軽に言葉を交わしている様子。その後授業が始まると、ある子に向かって、消しゴムのかすを投げたり、背中をついたり、椅子を蹴ったりするいじめが始まる…このようにいじめの寸劇を見て「この劇の中にいじめはあるだろうか?」「あるとしたら誰におきているだろうか?」「どのタイミングで?」…そんな問いかけがジョーカー(進行役)から投げかけられる。観客は





あなたの意見を聞かせて！

だれにでもできることあるよ！

それに促されていじめについて考え始める。そして観客の有志が、いじめを受けていたであろう役の人と交代して、そのいじめを是正する役を演じてみる。「いじめは軽減、または解消されたか？」…再びジョーカーからの問いかけについて考え、他の方法を模索する観客たち。またさらに、別の観客が違う方法でいじめを是正する役を演じていく…。

ワークではそこに取り出された問題を共有し、考え、解決法を模索し、演じ、それに触発され、また他の方法を模索する。目の前で展開する演劇によって視覚的に捉えることで問題に対する肯定的な打開へのイメージを持つことをめざす。また、「演じる」という自己表現によって人は解放され、解決の方向をより身近に感じるようになる。

この取り組みを進めてきたアンディ・ヒ

クソン氏（45歳）は今回来日のため1月にチームを発足、以来子どもたちのファシリテートにあたっては、「子どもたちが自分たち自身のワークショップを創り出すためにアクションワークの手法とファシリテーターのエッセンスを伝えただけ」と話す。

ワークでは、いじめの寸劇のほかに、さまざまなゲームやエクササイズが行われる。人は楽しさを感じているときもつとも非暴力な存在になる。そこで共有される体感は極力言語化しないで、その人が感じたことはそのまま尊重、肯定、受容される。それは「私自身」がそこにいる人との関係性を望んでいるのか？「信頼をつむいでゆくのか？」という関係性を創るプロセスとなる。まさにわたしのチカラの源は「わたし」なのだ。

いじめをなくすために

人は一人ひとり多様な存在であり、それぞれの関係性の中で生かされている。そのためおのずと力関係が生じてくる。だから「いじめをした側／いじめをされた側」と簡単に分けられない。誰もが、誰かにいじめられた、と感じたことがあるだろうし、誰かに対して攻撃的な気持ちを持ったこともあるだろう。たくさんの矛盾や問題を抱える、この現代社会においていじめは子どもに限らず、誰にでもどこにでも起こりうることなのだ。まず、社会においてその共

通認識を持つことが必要だろう。それを踏まえた上で、では、隣の人と、大切な人と、どのような関係性をつむいでゆくのか、そのことを一人ひとりが考え、行動することが求められる。

日本のNPO／NGO活動の中には、子どもたちのためのオルタナティブな活動がたくさんある。筆者もCAP（子どもへの暴力防止）やSEAプログラム（ありのままの自分を生きるための人権教育）といった活動に参加している。今回、来日したイギリスの子どもたちの様子、そしてワークの場に参加した日本の子どもたちや参加者を見て、多様な子どもたちへのアプローチが、子どもたちが持つ本来の可能性を発揮することにつながることを、子どもたちにとって貴重な体験になることを実感した。今後、こうした活動が子どもたち一人ひとりに届くよう、NPO／NGOが連携し、活動を共有する方向性でつながることが大切だ。

かつて子どもであった大人も、それぞれに子どもの頃の葛藤や問題意識を抱いて「いま／ここに」いる。子どもの頃の純粋な疑問や想いを柔軟に社会変革のための活動に盛り込んでゆけば、いじめばかりでなく、社会の諸問題を解決するひとつの手立てとなるに違いない。子どもたちと共に社会を創ること、そのような市民活動の行動力が未来に向けて社会変革の原動力となるのではと考えている。